

新生面

医学の進歩に対抗して病氣も厄介なものがつきつきに現われる。水俣市の奇病、なんかもその一つだ。なにしろ病氣の原因がわからないの

だから、患者を治療するにも予防対策を講ずるにも、手の施しようがない▼という奇病を奇病なりと片づけられては困る。医学陣もなんとか病原体をつきとめなくては困子が立つまい。ここにちかごろ魚介類による中毒説が出てきており、同地方の魚が食べられなくなると地元漁民にとっては死活にかかわる大問題だ▼この奇病が発生してからすでに三年以上になる。この間地元病院や熊本医学部ではもちろん原因究明に躍起となつてきた。おかげでいろいろ結論まちまちと出たが、いま一歩というところで大学側にも困つた問題が起きてゐる▼どうしたのは、この奇病患者の研究費がなかつた。これまで研究用患者のかき入れた予算を回してもつてきたのだが、予算こぼられて当面急を要する奇病の研究すら思うに及ばぬと、県をひいては熊本県文部省と政府とにう

ことになる▼もつとも中央にも関心があつたとみえて、ここに乗り込んできたのが国立公衆衛生院だつた。しかしいくら厚生省が乗り出しても、モノをいうのはこれまでの熊本医学部の研究実績だ。厚生省がその付属機関に大学側の研究成果を横取りさせる結果になつては大学としても面白くない▼こんなことでせいかくの原因究明が道草を食つてはまずい。心配した厚生省が両者の調整に當つてゐる。いろいろと役者にはそろそろきた感したが、異は早く原因をつきとめて予防対策を樹てることである▼ちかいつた結論としては、細菌やウイルスではなく、毒物、たという説が有力化してゐる▼もし毒物だとすれば、そういう毒物がどうしてそこにあるかが究明せられねばならぬが、また毒物だという結論で導くまでも、いろいろな方面の協力が必要である▼とかく地味な争闘がしたが、国民を病氣から守るため「毒」の立派な場としての使命が、厚生省と熊本大学とに課せられてゐる▼奇病征伐の近道である。